



東京

私文館

貴行

ちやんく退治序

物大なりと雖も必らぎしも貴ぶべからず、

物小なりと雖も必らずしも賤むべからず、

若夫れ物の大なるを以て貴しとせば、奈良

の大佛の釋迦如來の上に在るべく、若夫れ

物の小なるを以て賤とせば、淺草の觀世音

の仁王乃下し附さるべからず、天下豈よ斯

の如き理屈あらんや、試みに思へ、獨活は大

木にして馬鹿の稱あるも、山椒の小粒よし





二  
てヒリ、と辛く、南京米の五斗俵なるも日本米乃一升、だも及はざると一般、而して今や日清兵を交へ、戦争既、數旬、渉る、其國と國とを比較する、於ては、彼或ひの大ならん、我或ひの小ならん、然れども、彼は元無能無智、我の素より多能多識、彼に又、腸おく、膽おく、我に、武あり、勇あり、已、能あり、識あり、武あり、勇あり、何者か、之、敵すべし、是を以て一戦一闘、其力を角する、毎、

日本必らず大勝利を博す、是れ淺草の觀世音よして仁王を門番に使ひ、釋迦如來よして奈良の大佛を權助に使ふ、同一理、何の不可思議か、之あらん、道人爰よ一書を編著し、題して清兵退治の歌と云ふ、此書甚だ小よして紙數も亦た少あく、只童蒙の一翫具に過ぎ、雖も若し幸ひに其形を取らずして、其意を探り、所謂小粒の山椒もヒリ、として辛さ處を味ふ人あらば、是れ編者が滿

足とする所のみ

時又明治廿七年第八月下旬日本大勝利の  
新聞號外を賣る聲を聞き愉と呼び快と勇  
みあがら

骨皮道火識

ちやんく退治

目録

- 日清乃交戦に就て
- 南京玉を買て感あり
- 軍歌の口眞似
- 孟子摘句當世見立
- 縁かいな節
- いろは數へ歌

- 落語
- 一口話
- オツペケ節
- 滅茶く節
- 壯士唄愉快節

清兵退治の歌

骨皮道人著

今や日清の交戦に就て  
 我が帝國大日本の海陸軍が其勇猛武烈ある  
 彼の朝鮮京城よ且つ豊島海よ猶且つ成歡よ牙  
 山よ威海衛よ戦へば必らず大勝利を博するの  
 みちよ彼が墨案を抜き彼が軍艦を奪ひ彼が  
 生首の環いで以て幾万の珠數を造るべく彼が

軍器の束ねて以て幾千把の薪と爲すべし是も  
 於てか流石大法螺吹のヘナチヨコ野郎大狡猾  
 のちやんく坊主も今ハ早や藥罐のゆで鯛と  
 一般手も足も出ざるも至りしハ豈も亦た小氣  
 味の宜き次第あらずや豈も亦た大愉快の至  
 ならずや  
 夫れ然り帝國大日本の海陸兵ハ已ハ斯の如き  
 大勝利を博し又た我々國民をして外人ハ對し  
 ても大ぬに肩身の廣さを覺えさしむ而して此  
 大勝利を博し我々までをも肩身の廣さも至ら

しひたるハ果して是れ誰の力あるか

勅聖文武至仁至愛も渡らせ賜

ふ 我天皇陛下の御餘光と彼の忠實勇武あ  
 る海陸軍其人の力とよ依らずんばあらず况ん  
 や我々の常住坐食して各々其堵も安んじ一家  
 團樂笑聲を漏しつゝあるも彼の戰場も在るの  
 人々の孝を捨て親も離れ愛を割て妻子も別れ  
 一身を路傍の露と輕んじ金石も亦た將も蕩け  
 んとぞる百度内外の炎暑を冒しあがら異域の  
 山谷も露臥し炮煙彈雨も咽びつゝあるも於て

をや  
 嗚呼我々の何を以て此人は報ひ何を以て此人  
 又謝せんとするか他なし只一片の至誠心以て  
 常住坐食の者も彼の戦地は在る人の心を以て  
 心と爲し家政の冗費を省き稼職の勞力を  
 倍し其得る處を以て軍費の幾分に献じ慰勞の  
 幾分に贈る是れ報國の一端のみ我が同胞の愛  
 國者よ男女老幼の素より論せず請ふ舉つて之  
 を勉めよ

◎南京玉を買て感あり

道人此頃小兒の袂に紐り付て迫るゝ任せ夕刻  
 より運動かたゝ或縁日に至る蓋し小兒の道  
 人又迫るや其意信心よ非ずして専ら翫弄物  
 を買て貰はんと欲するゝ在るあり而して縁日  
 の商人も亦た此等の小兒を釣込を以て目的と  
 するが故に其商ふ處の品物の概ね食物も非ず  
 んば則ち翫弄物たり小兒先づ足を此翫弄店の  
 前よ止め暫く彼是を見比べつゝ遂に一品を指  
 して之を買て頂戴と云ふ是即ち南京玉よして  
 其箱小ありと雖も其中よ數万粒を入れ之を蔽



むガラスの蓋を以てず而して其南京玉たる粒  
 く皆其色を異よし赤きあり黒きあり白きあ  
 り青きあり五色の外は猶二三色を交へ随分奇  
 麗よしして小兒の欲がるも亦た尤も亦品なれど  
 も其價を問へば一箱僅かよ一錢とい實よ氣の  
 毒あはど安い物なり是よ於てか道人以爲らく  
 今や日清事起り戦ふ毎よ日本兵大勝利を博す  
 此時よ當つてや一箱一錢の南京玉を買ふも亦  
 た至極面白しと乃ち云ふがまよく是を買て  
 小兒に與ふ小兒大ぬよ喜び直よ持歸つて之を

何よするかと思へば一筋の糸よ通して根氣よ  
 く珠數繋ぎと爲せり道人晩酌の傍ら其爲す處  
 を熟視し知らず識らずボンと膝頭を叩いて曰  
 く南京めと一と珠數繋ぎとなすの頗る愉快く  
 然も其糸の赤きハ成歡よ首を刎られた奴ある  
 べく其青きハ豊島の沖よ運送船を沈められて  
 土左衛門となりたる奴あるべく其黄色あるハ  
 砲聲に膽を潰して目を廻したる奴あるべく其  
 紫色あるハ迎も助からぬと思ふて首を縊り血  
 液の循環を止めたる奴あるべく猶其白きハ牙

山を追拂はれて潰走する途中遂に餓死んで駭  
 骨とありし奴あるべく其黒さハヤット命から  
 く本國へ逃歸りたるも生憎黒死病に執着れ  
 て死したる奴あるべし嗚呼愉快ある哉愉快あ  
 る哉か負ふ此等を片ツ端から生捕て珠數繫ぎ  
 と爲すに至つてハ又一層の愉快あり成ほぞ此  
 玉の數万あるも別は是と云ふ効能もあく只小  
 兒の飢弄物とあるも至極尤もたと云へバ小兒  
 も之に感じたて見へて俄に其南京玉をパチ／＼  
 と投り出し其様延喜の悪い物の否だから

今度の日の丸の旗を買て頂戴と云ひたるも亦  
 た心地よき事にてありき

◎愉快の説

人の日々相用ゆる言語に於るや、今昔必らずし  
 も一ならず、概ね時勢の變遷或ひハ不圖した表  
 裏から耳馴ぬ新語を生出するものにして、就中  
 く維新以來漢語俄か流行し、車夫も自ら稱し  
 て僕と云ひ、お三も朋輩を呼んで君と稱し、或ひ  
 ハ丁稚も自主自由を唱へ權助も權利義務を口  
 むするに及び、夫が爲め漢語字類漢語手引草を

と云へる日用言語の字引さへ出来たる位ありしが、其後府縣町村會の開けるも當り、又候賛成起立不同意などの語が流行せしも、是れ又已ま陳腐も屬し、方今専ら流行し且つ最も勢力あるの語ハ、彼の帝國議會より生出したる處の、緊急問題、不信任、斷行、彈劾、衝突、撤回、解散、停會、運動、方針、其他五六種の語あり、而して斯く其時勢と成る場合に於て盛衰ある、數限りのなき言語の中より就て、相變らず人の之を棄ずして依然口よするハ、抑々何等の語かと云はば、即ち愉快と云へ

る一語にふある、成ほと此愉快と云ふハ誠と調法を語として、例へば粗肴粗菜と雖も晚酌三杯以て微醺を帶るも愉快なり、粗菓粗菜と雖も苦茗一椀以て塵胸を洗ふも愉快なり、一枚一本以て安女郎を買ふも愉快あり、纏頭半助以て轉び藝者に戯むるも愉快あり、待合の奥座敷も四季の花を弄するも愉快あり、割烹店の奥二階も爪弾を試みるも愉快あり、親友相會して碁を圍み將棋をさすも愉快あり、雅友相集つて詩を作り文を草するも愉快あり、春風駘蕩の日墨陀提

上<sup>ト</sup>、又<sup>モ</sup>散策<sup>さんさく</sup>するも愉快<sup>うきげん</sup>あり、苦熱<sup>くねつ</sup>煩蒸<sup>はんじやう</sup>の夜<sup>よ</sup>三<sup>さん</sup>又<sup>また</sup>江<sup>え</sup>上<sup>じやう</sup>、又<sup>また</sup>涼風<sup>りやうふう</sup>を納<sup>おさ</sup>るも愉快<sup>うきげん</sup>あり、金風<sup>きんふう</sup>颯々<sup>さつさつ</sup>の夜<sup>よ</sup>芝浦<sup>しばうら</sup>、又<sup>また</sup>月<sup>つき</sup>を眺<sup>なが</sup>むるも愉快<sup>うきげん</sup>なり、塞風<sup>さいふう</sup>凜々<sup>りんりん</sup>の日<sup>ひ</sup>東台<sup>とうだい</sup>、又<sup>また</sup>雪<sup>ゆき</sup>を愛<sup>あい</sup>するも愉快<sup>うきげん</sup>あり、芝居<sup>しばい</sup>を見<sup>み</sup>るも愉快<sup>うきげん</sup>なり、寄席<sup>よじ</sup>を聴<sup>き</sup>くも愉快<sup>うきげん</sup>あり、謠<sup>うた</sup>ふも愉快<sup>うきげん</sup>あり、踊<sup>おど</sup>るも愉快<sup>うきげん</sup>なり、議員<sup>ぎいん</sup>の競争<sup>きやうさう</sup>も愉快<sup>うきげん</sup>あり、壯士<sup>さうし</sup>の撲<sup>たた</sup>り合<sup>あ</sup>ひも愉快<sup>うきげん</sup>あり、世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>の進歩<sup>しんぷ</sup>も愉快<sup>うきげん</sup>あり、人智<sup>じんち</sup>の發達<sup>はつたつ</sup>も愉快<sup>うきげん</sup>あり、其他<sup>そなた</sup>風流<sup>ふうりゆう</sup>と俗事<sup>ぞくじ</sup>とを問<sup>と</sup>はず、愉快<sup>うきげん</sup>ある事<sup>こと</sup>の富士山<sup>ふじさん</sup>の砂利<sup>すずり</sup>より多<sup>おほ</sup>く遠州灘<sup>えんしゅうなん</sup>の泡<sup>あわ</sup>ツ粒<sup>つぶ</sup>より澤山<sup>たくさん</sup>よして、迎<sup>むか</sup>へも枚舉<sup>まいきよ</sup>よ違<sup>ちが</sup>あらずと雖<sup>いへ</sup>も、是<sup>こゝ</sup>

等<sup>ら</sup>の愉快<sup>うきげん</sup>ある愉快<sup>うきげん</sup>、即<sup>すなは</sup>ち愉快<sup>うきげん</sup>よ、相違<sup>さうち</sup>なきも只<sup>ただ</sup>一人<sup>ひとり</sup>一個<sup>ひとつ</sup>若<sup>わか</sup>く、僅<sup>わずか</sup>かよ一<sup>いっ</sup>部分<sup>ぶぶん</sup>よ屬<sup>ぞく</sup>するの愉快<sup>うきげん</sup>、又<sup>また</sup>して、真<sup>まこと</sup>の愉快<sup>うきげん</sup>とするよ足<sup>た</sup>らず、然<sup>しか</sup>らば則<sup>すなは</sup>ち如何<sup>いか</sup>ある事<sup>こと</sup>をか真<sup>まこと</sup>の愉快<sup>うきげん</sup>と爲<sup>な</sup>すかと云<sup>い</sup>ふに、他<sup>た</sup>あし國<sup>くに</sup>と國<sup>くに</sup>との戦争<sup>せんそう</sup>に於<sup>お</sup>て、大勝<sup>たいしやうり</sup>利<sup>り</sup>を得<sup>え</sup>たるとき、即<sup>すなは</sup>ち是<sup>こゝ</sup>なり、今<sup>いま</sup>や日清<sup>にっしん</sup>の交戦<sup>かうせん</sup>に際<sup>さい</sup>し日本<sup>にほん</sup>已<sup>ま</sup>よ全勝<sup>ぜんしやう</sup>を博<sup>ひろ</sup>す、况<sup>いは</sup>んや朝鮮<sup>ちやうせん</sup>の大改<sup>たいかい</sup>革<sup>かく</sup>も日本<sup>にほん</sup>の威力<sup>ゐりき</sup>を以<sup>も</sup>て八<sup>はち</sup>九<sup>く</sup>分<sup>ぶん</sup>通<sup>と</sup>りまで成就<sup>じゆうじゆ</sup>し、西洋<sup>せいやう</sup>諸國<sup>しよこく</sup>も亦<sup>また</sup>た舌<sup>した</sup>を卷<sup>ま</sup>て日本<sup>にほん</sup>の勇膽<sup>ゆうたん</sup>義心<sup>ぎしん</sup>あるよ吃驚<sup>きつきやう</sup>しつゝ、あるよ於<sup>お</sup>てをや、之<sup>これ</sup>を是<sup>こゝ</sup>れ大愉快<sup>たいうきげん</sup>と謂<sup>い</sup>はずんば何<sup>なに</sup>

をか大愉快と謂はん、嗚呼愉快の文字是も於て  
か大ぬも必要あるを知る、時勢の變遷もつれて  
他の言語ハ盛衰あるも、只愉快の一語のみ依然  
として動かざる亦た宜ある哉聊か感ずる所あ  
つて愉快の説を作る、

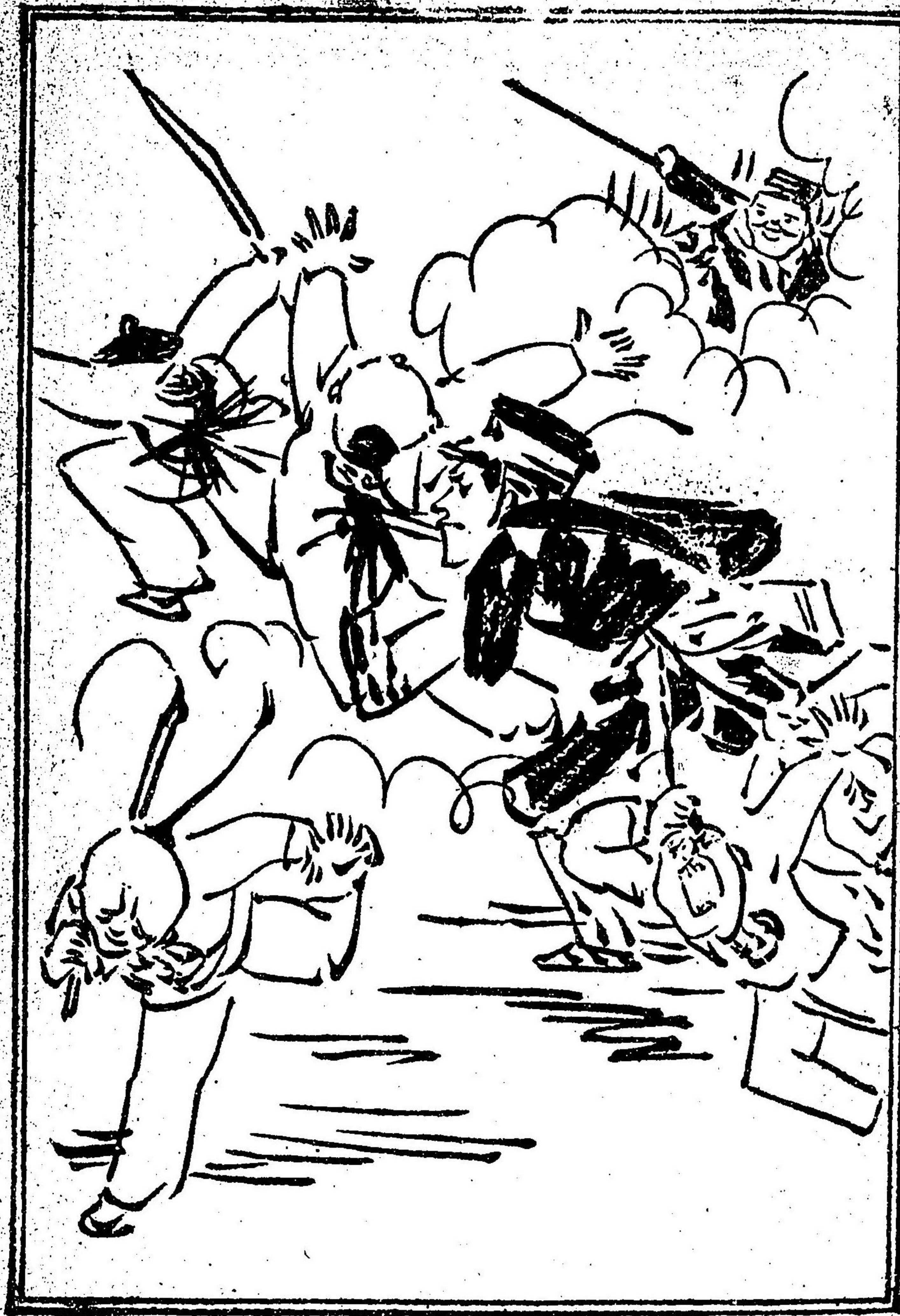
◎軍歌の口真似

○豊島の海戦

此處は朝鮮豊島を。 距る事僅か、數十町。  
沖を馳來る支那の艦。 續く運船三四艘。

ぢやんく坊主の乗込で。 ナイくバアく其態を。  
見れば裏家の掃溜に。 慈姑を捨たる如く泣り。  
兎角する中彼奴め等ハ。 我ハ喧嘩を持かけて。  
お先眞暗恥知らず。 ドンく打出す無鉄砲。  
此有様に日本船。 此奴不埒な奴なりと。  
不便ながら筒を向け。 何の苦もなく打倒を。  
打れて彼奴め等泡を食。 旗と舌とを共ハ卷き。  
操江号は尋常に。 天窓を下て降りたり。  
然るに運船高陸ハ。 血迷つたのか逆上たろ。

但しハ目でも眩んだか。猶も強情負ん氣よ。  
 止せば宣のに蟠螂の。龍車に向ふ不了見。  
 一旦降参志九癖に。欺す心の淺墓よ。  
 然れば打棄置難く。此奴失敬極ると。  
 忽ち大砲打放ち。ブクくくと打洗む。  
 是も所謂る自業なり。是も即ち自得なり。  
 此時出來た土左衛門。總計一千五百名。  
 其處で濟遠廣乙ハ。是や堪ぬと滅茶くよ。  
 方角さへも定めなく。行成次第よエツサツサ。



何れともなく逃たるは。近頃笑止の至りあり。

○成歡の快戦

船一艘を沈められ、軍艦一艘生捕られ。

猶も懲ざる芥子坊主。もろく散とも知ずして。

又も繰出す豚尾兵。成歡最寄り尻を据へ。

例の天窓を振立つ。例の大法螺吹立つ。

鳥無き郷の蝙蝠を。氣取て此處に鷹張て。

率や來れど空いきみ。突然我に向ひたり。

斯と見るより日本兵。素より無益の殺生も。

我に寇なす上からは。迎も捨ては置れぬと。  
 大砲小銃破烈丸。之を食へと打にけり。  
 お負よ寄來小あつはを。片ツ端からチヨン切り。  
 斯る破竹の勢ひに。膽を潰らる豚尾兵。  
 命ばかりのお助けと。兩手を合して拜むあり。  
 旗も鉄砲も抛棄て。スタコラよんやさと逃あり。  
 繪よも書ない其様子。口にも云へない周章態。  
 恰かも夜半の大風よ。木の葉を散を如くなり。  
 其時軍器の分捕り。小銃大砲千餘挺。

其時地獄へ旅立り。大凡積つて五六百。  
 嗚呼ちやんくの其弱。餘り意思痴が無さ過る。  
 嗚呼日本の其強さ。流石は天下よ無類あり。

○牙山の大捷

向ふ處よ敵あしと。ドシく打入る日本兵。  
 向ふ度毎カラ負と。腰を抜かしぬ豚尾兵。  
 頼とにしたる成歡も。誠に首尾よく打敗れ。  
 又も牙山よ出直して。無い脳味噌を紋りツ。  
 土用半にブルくど。震へる弱虫寄せ集め。



此處を先途と防ぎしが。是も同トく駄目の皮。  
 只一戦は打まけて。薬罐のゆで鮓同様。  
 皆を手も出さず足も出さず。逃よの号令待すして。  
 命あつての物種と。一生懸命逃にけり。  
 二度ある事は三度ある。是で大負三度目。  
 是は引替へ日本兵。ズン／＼敵地へ進のみ。  
 遂に牙山の根據をば。奪ひ取たる腕前。  
 實に手際もものあるぞ。實に美事ものなるぞ。  
 嗚呼ちやん／＼の其弱。餘り意愚痴が無と過る。

嗚呼日本の其強さ。流石の天下に無類なり。

○日本の腕前

廣き世界乃其中に。數ある國の其中。  
 富たる國の何方ぞ。日本に優たる國のなし。  
 兵の強き何方ぞ。日本に優たる國のなし。  
 威張れよく諸共。天下無類と威張べし。

○其二

廣き世界の其中。光り輝く日本國。  
 文事開けて兵強く。殖産興業比類なし。

夫を知らずに向ふ見ず。若しも寇爲す奴あらば。何奴此奴の容赦あく。こッびぞら目にあはすべし。

○其 三

廣き世界の其中に。一際目立つ日本國。外に類なき大和魂。外に類なき日本刀。縦ちやんく坊主めグ。百千万人來るとても。片ツ端のら生捕て。豚尾頭をナヨ切るべし。

○其 四

廣き世界の其中に。文武盛あ日本國。

古來何國と戦ふも。負たる事へ更よあし。進むを知ツて退く。夢現よも知らざるぞ。以後の見しめ滅茶くよ。豚の尻尾をナヨ切べし。

○其 五

廣き世界の其中に。日本よ及ぶ國のなし。况て蛆虫同様の。野蠻極る豚尾國。赤子の腕を捻るより。まだ無造作事あるぞ。不埒働く上りらは。不便あがらも殺すべし。

○支那の弱兵

支那の元來野蠻國。支那の勿論未開國。  
 國は隨分大なれど。人の隨分多けれど。  
 是が世に云ふ大男。總身は智慧が廻り兼。  
 政治の亂脈人と無智。搗て加へて貧乏あり。  
 然れば諸國へ出稼ぎの。ちやんく坊主へ何十萬。  
 恥外聞も國辱も。平氣の平左の奴隸主義。  
 錢にさへ成や乞食でも。厭はぬ心の不便さよ。  
 斯る衰をな國あるは。斯る滅茶な土地あるは。  
 文化開明元知らず。富國強兵猶知らず。

夫で戦争ををやうと。隨分間拔な話しなり。  
 練出を兵ハ皆弱く。頼まれ人足同様ぞ。  
 お負の指揮する大將も。命を惜む者はかり。  
 夫で日本に勝ふとハ。虫の宜過る話しあるぞ。  
 向ふ度毎打たれるも。何の不思議な事やある。  
 出る度毎負るのも。何の怪む事やある。  
 弱さが強さ負るのは。極り切ある天理あり。

◎孟子摘句當世見立

○慨然鼓之兵乃既接 (日清の開戦)

- 盡<sup>ス</sup>心<sup>ヲ</sup>焉<sup>耳</sup> (朝鮮の大改革)
- 樂<sup>シ</sup>甲<sup>ヲ</sup>曳<sup>シ</sup>兵<sup>ヲ</sup>而走<sup>レ</sup> (清兵の潰走)
- 寡<sup>シ</sup>人<sup>ヲ</sup>願<sup>フ</sup>安<sup>シ</sup>承<sup>ル</sup>教<sup>ヲ</sup> (大院君)
- 天<sup>下</sup>莫<sup>ク</sup>強<sup>ク</sup>焉<sup>ヲ</sup> (日本の海陸軍)
- 如<sup>シ</sup>之<sup>ノ</sup>何<sup>レ</sup>則<sup>シ</sup>可<sup>ク</sup> (清國の狼狽)
- 兄<sup>弟</sup>妻<sup>子</sup>離<sup>散</sup> (閩族)
- 誰<sup>レ</sup>能<sup>ク</sup>禦<sup>ル</sup>之<sup>ヲ</sup> (日本陸兵牙山の大勝利)
- 不<sup>レ</sup>忍<sup>ビ</sup>其<sup>ノ</sup>殺<sup>ス</sup>斃<sup>ス</sup>若<sup>シ</sup>就<sup>シ</sup>死<sup>ニ</sup>地<sup>ニ</sup> (朝鮮王妃の廢位)
- 是<sup>レ</sup>折<sup>レ</sup>枝<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>類<sup>也</sup> (日本陸兵成歡の大勝利)
- 舉<sup>テ</sup>欣<sup>々</sup>然<sup>ト</sup>有<sup>リ</sup>喜<sup>シ</sup>色<sup>也</sup> (宣戰の詔勅)

- 與<sup>シ</sup>甲<sup>兵</sup>危<sup>ニ</sup>士<sup>民</sup> (李鴻章の見當違ひ)
- 將<sup>リ</sup>以<sup>テ</sup>求<sup>フ</sup>吾<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>欲<sup>ス</sup>也 (日本の希望)
- 猶<sup>シ</sup>緣<sup>レ</sup>木<sup>ヲ</sup>而<sup>シ</sup>求<sup>フ</sup>魚<sup>也</sup> (清國政府の頓珍漢)
- 弱<sup>ク</sup>固<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>敵<sup>ス</sup>強<sup>ク</sup> (清兵の意愚痴をし)
- 散<sup>ラ</sup>而<sup>シ</sup>之<sup>ニ</sup>四<sup>方</sup> (ちやんく坊主の歸國)
- 非<sup>シ</sup>擇<sup>シ</sup>而<sup>シ</sup>取<sup>ル</sup>之<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>止<sup>ム</sup>也 (操江號の捕拿)
- 効<sup>シ</sup>死<sup>シ</sup>勿<sup>ク</sup>去<sup>ル</sup> (大和魂)
- 民<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>悅<sup>ビ</sup>之<sup>ヲ</sup>猶<sup>シ</sup>解<sup>シ</sup>倒<sup>シ</sup>懸<sup>シ</sup>也 (朝鮮國の人民)
- 堅<sup>ク</sup>者<sup>ノ</sup>在<sup>リ</sup>位<sup>ニ</sup>能<sup>ク</sup>者<sup>ノ</sup>在<sup>リ</sup>職<sup>ニ</sup> (大日本帝國)
- 皆<sup>シ</sup>悅<sup>ビ</sup>而<sup>シ</sup>願<sup>フ</sup>藏<sup>ル</sup>於<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>市<sup>ニ</sup> (獻納品)

○戦必勝矣

(大日本帝國陸軍海軍万歳)

◎縁かゝる節

○豊島の戦ひ

日本ハ陸軍海軍も皆奮ふた腕自慢  
論より証據ハ豊島も勝たハ此方が先かゝる

○陸戦の勝利

敵を攻立て成歡と續て牙山も奪ひ取る、  
是ハ陸地の大勝利、今度の海軍の番かゝる

○松崎大尉

敵の要害安城渡、渡る武勇の日本兵

中よも戦功第一ハ大尉松崎君かゝる

○日本の強兵

敵を目掛けて飽までも進む日本の武士ハ、  
外に類なき大和魂、腕を振ふて來んかゝる

○其二

向ふ處に敵あしと、勢ひ破竹の日本兵、  
恐れる敵地の兵隊ハ皆弱虫連かゝる

○支那の弱兵

成歡牙山を拂はれて、皆あチリくバラくど、  
逃て音沙汰更あし、早く二の手ハ出んかゝる

○其二

日本は引替へちやんくいの戦争する度負を取り、  
顔見りや直様逃るとい、弱い兵隊さんかいな

○凱旋

数度の戦争皆を勝利かちとさ揚る勇まじさ、  
韓人までも喜こびて造る凱旋門かいな

○朝鮮の改革

今度新たな朝鮮も、政治向をバ改革し、  
出来た内閣諸役人、閔族が残らず免かいな

○其二



大島公使の骨折で、開化に進む朝鮮の、  
万事改良するが爲め、世よ出た大院君かいる

○威海衛

支那の軍艦二三艘、居ると聞たる威海衛  
向へは直は何處へやち、逃たの威海衛かいる

○寄贈金

國の爲どの云ひるがら、命を的の人を、  
思ふ心の寸志とて贈る慰勞の金かいる

◎いろは數へ歌

○いの字とせし 至る處に分捕のく軍器

○ろの字とせし 山あす心地よき、  
 論より証據の軍艦をく、  
 ○はの字とせし 生捕る日本の其強さ、  
 破竹の勢ひ何處までもく、  
 敵を追ひ行く日本兵、  
 ○の字とせし 再び花咲く開化黨、  
 日本保護受け朝鮮の、  
 ○はの字とせし 外は想あき大和魂、  
 進みぬすれども退ぞかず、  
 ○への字とせし 閉口したのか支那兵、

○の字とせし 二の手の編み不便さ、  
 北洋艦隊大閉口、  
 ○ちの字とせし 早く降参するがよい、  
 力及ばぬものあらば、  
 ○りの字とせし 飛で火よ入る夏の虫、  
 理も非も分らぬ支那政府、  
 ○ぬの字とせし 天地動かす响、  
 類を集めた弱武者の、



直又逃出す可笑さま、

○その字とせ、面白きはど打ち勝て、

日本兵士の勇ましや、

○あの字とせ、我は寇する上から、

飽まで退治よや腹が癒ぬ、

○かの字とせ、加勢たのみて朝鮮、

首尾よく改革為し遂る、

○よの字とせ、餘儀なく繰出す隊尾兵、

衛へ一足跡三足、

○たの字とせ、頼む朝鮮頼まる、

是も日本の義侠心、

○れの字とせ、列を作りし日本兵、

敵勢堂々いかめしく、

○その字とせ、頼ひも頼ふた國虫が、

さうして日本は勝てやうや、

○この字とせ、杖よ柱と我國を、

便る朝鮮新政府、

○ねの字とせ、念の爲とて國々へ、

支那と戦争の通知文、

○まの字とせ、長い評議の支那兵は、

閉口したのか恐れたか、く

○らの字とせし 乱脈をわまる清國、く

指揮も軍法もあらばこそ、く

○むの字とせし 群がる敵兵打拂ひ、く

獲す譽れの愉快さよ、く

○うの字とせし 腕よ覚えの日本刃、く

寄來る敵をバ打拂へ、く

○ぬの字とせし 居たか居あいか威海衛、く

泰かくした支那の艦、く

○の字とせし のべつよ負てもまだ懲ず、く

耻の上塗り笑ふべし、く

○かの字とせし 大ききばかりで智慧のさし

く、迂奴の大木とけおせじ、く

○くの字とせし 慈姑天窓をふり立て、く

口惜がるのも無理なさい、く

○やの字とせし 遣り損ねたる敵軍、く

陸でも海でも茶く無茶苦、く

○まの字とせし 松崎大尉の軍功、く、末世

末代芳ばしき、く

○ひの字とせし 見當ちがひの軍略、く

又も不首尾の李鴻章く

○ふの字とせし 船の捕れる又た沈むく

其れはかき茶子坊去く

○この字とせし 狡猾手段も盡き果てく

今と哀れや虫の身く

○えの字とせし 得手し帆を揚げ陸と海く

敵地よ攻入る其勇氣く

○ての字とせし 敵も勝たる祝ひとてく

互ひも飲む酒世界一く

○あの子とせし 雨を聚の銃丸もく

恐れぬ氣性の日本兵く

○さの字とせし 去りさの強情なちやんく

よく、降伏しあけりや皆殺しく

○さの字とせし 昨日も勝やら今日も勝つく

新聞號外二号文字く

○ゆの字とせし 行よ行けく皆共みく

先ハ未開の野蠻國く

○めの字とせし 目指す成敵牙山兵く

打拂ひたる氣味のよさく

○みの字とせし 美事敵をバ打据てく

日本の譽れを輝かす、

○しの字とせし 四百餘州の宜けれども、

意思痴無けれバ笑ひ草、

○まの字とせし 益あゝ殺生と云へど、

此後の戒め打据よ、

○ひの字とせし 百戦百勝外國の、

人も舌巻く日本勢、

○もの字とせし もろい筈だよ、

旭の伊旗み散る命、

○せの字とせし 世界よ名高き此日本、

文武備はる開化國、

○すの字とせし 數万の軍勢押し掛て、

四百餘州を蹂躪す、

◎落話

ナヨく、ちよつと君、これを聞給へこれを、

今度の日清事件、就き僕が例の頓才即智を以

て、頗る上等大極上、吉無類飛切り天下無双と

も謂つべき軍歌を作爲へたから聴たまへ……

エ、オイ大將小隊先づ此方へ進み給へ、何を云

つてるのだ、慌忙しい、どんな物が出来たのだ、こ

んち物だマア聴たまへ、處で之を君も聴しめる  
 の前も當つて、豫じめ君の注意を促して置かん  
 ければ成らぬ事があるヲ、开の何事かと云ふも、  
 蓋し僕の作としてハ實も餘り上出来の方も  
 非ざるの一件である「オィ、申戯ぢやアない  
 僕ハ今日ハ急ぐのだよ、早く本音を吹て仕舞た  
 まへ「オィ、エース諾、承知した……エ、ト先づ斯う  
 云ふのだ……ハテナ何處にかあつたテ……エ  
 、トハテナ先刻鼻汁をかんだが……申戯ぢや  
 アあらよ鼻ツ紙を再調するなんざア恐れるせ



「マアサ急せいての事を仕し損そんじる少し緩ゆるくりして居  
たまへ……ふ、あつたは、是これだ、是これさへあ  
りやア大願成就たいがんじゆソ、ラ僕ぼくが君きみも聽きしめんと欲ほつ  
する所ところの者ものの即すなはち是これあり……エヘン先まづ斯かだ、  
廣ひろき世界せかいの其中そのなかよ。光ひかりり輝かがや々た日本國にほんこく。  
富國強兵ふこくきやうへい類たぐひ無なく。  
さうだ旨うまいだらう、あるほど夫それから……」エ、ト  
夫それから何なんとか云いつたケ……オツト失敬しつげい、是これ  
はまだ完備くわんびしない方ほうだツた、困こまるあア夫れじや  
ア何なにれ又また來こやう君きみの存外ぞんぐわい性せい急きゆうで困こまるよ、マア

待たまへ、其様を急性ぢやア團子<sup>だんご</sup>を食ふ度に咽<sup>のど</sup>の穴<sup>あな</sup>が塞<sup>ふさ</sup>がるよ………ふ、あつたくヤツト原<sup>はら</sup>稿<sup>がう</sup>を見附<sup>みつけ</sup>出した、もうべたもんだサア聴<sup>き</sup>たまへ………エ、ヘン、此<sup>この</sup>咳<sup>せき</sup>拂<sup>はら</sup>ひの附録<sup>ふろく</sup>だよ、處<sup>ところ</sup>でその第一

行<sup>い</sup>よ行<sup>け</sup>けく兵士<sup>へいし</sup>よ。 行<sup>い</sup>よ行<sup>け</sup>けく諸共<sup>しよとも</sup>よ。  
千里<sup>せんり</sup>の波濤<sup>はたう</sup>を打越<sup>うちこ</sup>て。 夷狄<sup>えいてき</sup>を攻<sup>せ</sup>るも愉快<sup>ゆきあし</sup>あり。  
古來<sup>こらい</sup>日本<sup>にほん</sup>の大<sup>だい</sup>丈夫<sup>じやうぶ</sup>。 何<sup>なに</sup>れの國<sup>くに</sup>も向<sup>むか</sup>ふとも。  
何<sup>なに</sup>れの國<sup>くに</sup>と戰<sup>たたか</sup>ふも。 負<sup>ま</sup>たる例<sup>たと</sup>しに更<sup>さら</sup>ふまし。  
進<sup>すす</sup>めよ、皆<sup>みな</sup>進<sup>すす</sup>め。 凱旋<sup>がいせん</sup>する日<sup>ひ</sup>を待<sup>まち</sup>ずかし。

と云<sup>い</sup>ふのだが、どうも拙劣<sup>ちやくじやく</sup>やうよ思<sup>おも</sup>はれるから  
又<sup>また</sup>た新<sup>あらた</sup>も遣<sup>や</sup>つて見た、  
行<sup>い</sup>よ行<sup>け</sup>けく兵士<sup>へいし</sup>よ。 行<sup>い</sup>よ行<sup>け</sup>けく諸共<sup>しよとも</sup>よ。  
敵<sup>てき</sup>の百<sup>ひゃく</sup>万<sup>まん</sup>ありとても。 味<sup>あじ</sup>方<sup>かた</sup>の無<sup>む</sup>双<sup>じゆう</sup>の大<sup>だい</sup>丈夫<sup>じやうぶ</sup>。  
死<sup>し</sup>して未<sup>み</sup>開<sup>かい</sup>の弱<sup>じやく</sup>卒<sup>そつ</sup>よ。 争<sup>いさ</sup>で一<sup>いっ</sup>歩<sup>ぽ</sup>を譲<sup>ゆづ</sup>るべき。  
芳<sup>かんば</sup>しき名<sup>な</sup>を異<sup>い</sup>國<sup>こく</sup>よ。 輝<sup>かや</sup>かすのも愉快<sup>ゆきあし</sup>あり。  
進<sup>すす</sup>めよ、皆<sup>みな</sup>進<sup>すす</sup>め。 凱旋<sup>がいせん</sup>する日<sup>ひ</sup>を待<sup>まち</sup>どかし。  
と遣<sup>や</sup>り直<sup>なお</sup>して見たが、是<sup>こゝ</sup>も矢<sup>や</sup>ッ張<sup>ば</sup>り拙<sup>ちやく</sup>いからも  
う一<sup>いっ</sup>ツ遣<sup>や</sup>らうかと思<sup>おも</sup>つたが、其<sup>その</sup>様<sup>よう</sup>なに骨<sup>ほね</sup>を折<sup>お</sup>る  
と腦<sup>のう</sup>味<sup>あじ</sup>増<sup>ぞう</sup>が減<sup>げん</sup>から先<sup>ま</sup>づ此<sup>この</sup>位<sup>くらい</sup>にして置<sup>お</sup>いた、ナン

ト旨からうか拙からうか、拙からうか旨からうか  
かど云はれて、相手方の男も挨拶も困つたと見  
へ「あるほと是ハ漢伏だ

○其 一

世の中より随分負かしみの強い、一種毛色の變  
つた者もあるものだ、例へばお前の相撲も負た  
さうだと云へば、ナニ彼の故意と轉んだのだと  
云ひ、お前の様よさう年々年中貧乏をして居て  
も困るぢやアあいかと云へば、ナニ金がある  
と不用心でいけあいかから結句一文無しの方が

野ん氣で宜まど、何事も一切負け惜みで持切  
て居る者があるが、彼の清國人が大抵皆此質  
で、此間も彼の國から歸京した人の話しに、今度  
の日清の戦争も付て餘りチヤンク坊主が弱  
過るから、其人が清國人も向つて愚弄半分よ、お  
前の國ハナニ其様も意愚痴が無さ過るのだと  
云へば、ナニ意愚痴のあいのぢや無い氣が捕は  
あいのだと云ひ夫ぢやア軍艦を捕られたり運  
送船を沈められたのハと云へば、夫ハ只間拍子  
が宜くあかつたのだと云ひ、然らば成歡の戦ひ



よ滅茶くよ潰走したのんよ云へば其時何  
 か急用でも出来て歸つたのだらうと云ひ然も  
 日本へ分捕た彈藥銃器の殆んを山のやうよ有  
 たさうだと云へば夫の捕られたのでない邪  
 魔よあるから置て來たのだと云ひ然らば彼の  
 とき何百人と云ふ豚尾頭を打つ切られたの  
 と云へばさうせ彼様を奴の國へ歸つた處が何  
 の役にも立たないから結りさうでも宜のだと云  
 ひ然らば其總督の葉志超が死んだのんよ云へ  
 ば夫やアいくら總督でも急病での仕方がある

と云ひ何と云ても飽まで負かしみを以て答へ  
 て居る處から此奴あか／＼強情を奴あり好し  
 く今度こそ一本打込んで呉れんと然らば右  
 の大敗北の後この手を纏ぐ事も出来あいで大  
 いよ屁口たれて居るのんさうだと云へば清國  
 人の相變らず澄アし込でナニ屁口たれたのぢ  
 やア無い危きよ近寄らあいのだと云ひ然らば  
 親玉の李鴻章が不首尾で費環章とか云ふ羽織  
 を脱されたのんさうだと云へばナニ夫やア脱  
 されたのでん無い餘り熱いから自分で脱たの

だど云ひし由、シテ見ると彼のチヤンく坊主  
の、日用の言葉まで旨くよびると見える。

○其 三

如何です先生、日清の交戦も大層面白くあつて  
来た様子ですが威海衛で彼の北洋艦隊が渤海  
灣へ逃こんだ以來の模様をお聞き込みですか  
「か」と疑ひの言葉を用ゆるあど、近頃以て其意  
を得んテハ、ア成ほど如何さま、尤もヘーさ  
うですか「さう人を輕蔑したもので、無い、僕  
のチヤンと風聲を特派委員を凡そ二三百人も

彼の地へ出張させてあるから、支那の兵隊が何  
万何千何百何十何人打ち殺されて、大砲小銃の  
分捕が何万何千何百何十何挺、兵糧の南京米を  
奪ひ取たのが何万何千何百何十何俵と云ふ事  
まで、一切合切残らず悉皆大呑込みのコンク  
チキだ「ハ、アあるほど如何さま、尤もヘーさ  
うですか……シテ左様も、承知もあつて居る  
處で只今の模様は如何です、勿論彼奴めは、大閉  
口でせう「大閉口も小閉口にも土臺もう話し  
ふも繪にも書かぬ始末「さうでせう何して彼

のチャンク坊主が何様かよアガいたつてモ  
 ガイたつて自團駄ふんだつて逆つべ返り蜻蜒  
 返りしたつて、到底日本よ勝やう筈がさいので  
 すからねへ「ヒヤク」夫ちやア愈々支那が降参  
 と極りましたかね、さうサ素より戦争をして負  
 れバ兜を脱で降参するの外にさいのだが、降参  
 するよ就ても是非償金を云ふものを出さ無け  
 れバ成らぬから、彼の李鴻章が先づ現在の金が  
 何の位あるだらうと、算盤珠と眼玉とをパチク  
 遣りあがら勘定して見ると、元々貧弱の上よ數

度の失敗もありかた、さうして償金に出す  
 處か只た五十兩しか無かつたさうだ、ハテね、支  
 那の素より貧乏國との聞て居たが、併し夫よし  
 ても五十兩との餘り酷過るぢやアありません  
 か「酷過ても何でも夫よ違ひさいのだから仕方  
 があ、」シテ夫がさうして知れました「その位  
 事が知れなくてさうするものか、支那の政府よ  
 五十兩(綿の財布よ五十兩)と云ふでないか

◎一口話し

○ちやんく坊主のさうしても日本よ叶の

ないとサ「其位な事ア清國承知た

○支那人の胴中をおツベし折たらベキインと音がした

○清國の宰相も餘り利口相でもあ

○チャン／＼と片附て仕舞ふ支那

○支那の砲臺と渤海を打毀した

○清兵の皆を膽玉が小さいから成歡の戦ひあ

どよの大砲驚いたさうだ

○又い負るのか知らと清兵(心配)して居る

○どうせ負たから日本の勝手よし

○支那の軍艦も餘は骨を折たけれを豊島ま

けた

○いくら酷い目よ逢ても強情を張て降参をし

あいとハ可笑支那奴だ

○日本兵支那兵よ向ツて曰く尙武く

○斷然大改革をしあけれハ朝鮮(所詮)だめだ

○牙山から逃た支那兵ハ兵糧を置去りよした

から大層腹が減てア、食物が糶く

○日本人よハ大和魂と云ふものが有るから必らず百戦百勝だと大兵樂

○京城の戦ひも大鳥氏怒つて曰くモウ韓兵が  
出来ぬ

○支那兵も今度と云ふ今度の大閉口して是や  
ア彈丸亂と逃た

○廣乙號を焼拂ふときも火傷してヤイタ、

○兩方とも日本も頭を下たとの韓清く

◎オツペケ節

餘計な世話だがりやんく坊主ナゼか其  
様なに弱いだろ、オツペケペく、オツペケ

ペツポ、ペツポツポ、

頃は天保の十五年、英吉利國も攻られて

美事よ負たを知らぬかへ、其後明治の十

七年、佛蘭西國にも攻られて、又候負たを

知らぬかへ、二度ある事から三度たよ、今

度も日本に負るかへ、可笑いぬへ、意愚痴

あし、オツペケペく、オツペケペツポ、

ペツポツポ

逃る路なくドシく打され、一も二もなく

沈む船、オツペケペ、く、オツペケペツポ、  
ツポツポ、

日本にほんの富國強兵ふこくきやうへいだ、清國しやうこくが貧弱ひんじやくの弱兵じやくへいだ、と  
んふふ齒軋はざいりしたとても、逆さかも日本にほんに勝かち  
ひせぬ、論ろんより証據しやうこだ、御覽ごらんあさい、豊島沖とよしまのち  
まの船ふね沈しづみ、二千ちか近くの土左衛門どざゑもん、魚うまも食く  
傷しやうするたらう、茲こゝ姑あの天窓あまの旨あまいかへ、何なん  
だか餘あまほど不味まずさうだ、オツペケペ、く  
オツペケペツポ、オツポツポ、

一しやう生懸命防けんめいぼういだけれと、矢張やばり逃にげ出だす腰こし  
拔ぬめ、オツペケペ、く、オツペケペツポ、  
ポツポ、

此處こゝを頗すこる要害やうがいと、三千餘ちやうさんじゆりの兵へいを出だし、  
成歡守せいくわんまもるを宜よけれとも、何奴なんにも此奴こゝも弱じやく  
虫むしで、豚尾頭ぶたびを並ならべたが、鱒ますを賣うるのちや  
あるまいと、頭數あたまかずでは勝かちあひよ、ドシ、く  
日本にほんよ打込うちこめ、此奴こゝたまらぬ閉口へいこうと、滅多めつた  
矢鱈やたらに逃にげ出した、其そのとき大將たいしやうはどうした

へ、是も鐵砲を置去りに、皆來い續けと逃げたのだ、態を見る、夫でも軍をする氣かへ、どうして無益だよ止しあさい、オツペケペ、く、オツペケペツポ、ペツポツポ、負て又たまけて又負てまけて、いつも犬死に支那の兵、オツペケペ、く、オツペケペツポ、ペツポツポ、

凡そ軍と云ふものゝ負るばかりが能ぢやあ、偶には勝氣になるがよい、負るの

國家の恥辱だよ、どの云へ力のあゝ者が強さよ勝たる例とあゝ迎も勝ぬと思ふあゝ、早く降参するがよい、戦ふ度毎敗北し、お負よ軍器を奪はれて、此様お埋らぬ事、あゝい、命を取られる數千人、如何に無智あるヤヤン、く、少くは此理を考へて、早く頭を下けぬかへ、どうしたへ、間拔とみるも程がある、オツペケペ、く、オツペケペツポ、ペツポツポ、

富國強兵文明開化世界は名高い日本國オ  
 ツペケペ、く、オツペケペツポ、ペツポツポ、  
 最初と幹兵追拂ひ、二度目、敵艦生捕て、  
 運送船をバ覆へし、夫から成歡打拂ひ、續  
 いて牙山も奪ひ取り、敵の生首引こぬき、  
 敵の軍器次ふんたくり、勇肝決死の勢ひ  
 に、敵も流石に大閉口、チリく、バラく  
 スタユラど、何處へ逃たが隠きたる、サツ  
 パリ姿が見へあいよ、定めし今頃ろ日干

ごろ、不便だね、是も自業で仕方があ、

オツペケペ、く、オツペケペツポ、ペツポ  
 ツポ、

是も仕合せ朝鮮國の日本のお蔭で開化す

る、オツペケペ、く、オツペケペツポ、ペツポ  
 ツポ、

不忠を閔族はびこきて、東學黨めが蜂起  
 して、政府の殆んど累卵の危き處へ日本  
 りち、大島公使が派遣して、一臂の力を添



たゆゑ、寇爲す敵をば打拂ひ、閔泳駿をを  
 遠島し、政治を一切改革し、全く獨立國と  
 あり、舊弊頑固を打棄て、文明開化を早替  
 り、四民同權嬉しい糸、人材登庸有難い、是  
 も、日本のお蔭だよ、仇や愚にれもふなよ  
 以來、日本を父母と思ふて御恩を送ら  
 ねを、天道様にも濟ふいよ、若しも粗末に  
 するときは、罰をてきめん當るぞへ、承知  
 かへ、何しろ結構ケツコツコ

◎滅茶ノ節

○日本の海軍の餘ッばを強いの、今度も亦た  
 勝利だチウて進み行く滅茶めちや、  
 扱てチヤカラカチヤンノ  
 ○日本の海軍の餘ッばを練たもの、下手な大砲  
 にや恐れんチウて攻掛る滅茶めちや、  
 扱てチヤカラカチヤンノ  
 ○日本の陸軍の餘ッばを宜そあるへ、面白い軍だ  
 チウて勇み行く滅茶めちや、  
 扱てチヤカラカチヤンノ

○日本の軍勢の餘ッばをえらひもの何奴も此  
奴もサア来いナウて追まくる滅茶めちや、

扱てチヤカラカチヤン

○日本の兵隊さんの餘ッばを強いの、ちやん  
坊主もや負あいなウて敗打る滅茶めち  
や、

扱てチヤカラカチヤン

○支那の兵隊さんの餘ッばを弱いの、日本よ  
の勝あいなウて逃出す滅茶めちや、  
扱てチヤカラカチヤン

○支那の軍艦の餘ッばをろいもの、打れて叶

はんナウテ捕られる滅茶めちや、

扱てチヤカラカチヤン

○支那の運送船の餘ッばを馬鹿な奴、日本に勝  
氣だチウて沈めらる滅茶めちや、

扱てチヤカラカチヤン

○支那の人間の餘ッばを耻知らず、奴隷でも構  
はぬナウて怒張る滅茶めちや、

扱てチヤカラカチヤン

○支那の政治の餘ッばを酷いもの、蛆虫同様

ウて壓制する滅茶めちや、

扱てチヤカラカチヤン、

○支那の李鴻章の餘ッぽと意愚痴あし、ひざら

負よだチウて叱られる滅茶めちや、

扱てチヤカラカチヤン、

○李鴻章の軍略の餘ッぽとまづいもの勳章の

遣れあいちウて剝れる滅茶めちや、

扱てチヤカラカチヤン、

○威海衛の砲臺の餘ッぽと悪い出来大砲で打

れたチウて崩れる滅茶めちや、

扱てチヤカラカチヤン、

○逃た廣乙號の餘ッぽと哀れあり、迎も役よの

立あいちウて焼拂ふ滅茶めちや、

扱てチヤカラカチヤン、

○清國の北洋艦隊の餘ッぽと臆病もの、日艦ッラ

來たヤレ來たチウて逃込む滅茶めちや、

扱てチヤカラカチヤン、

○逃たチヤン、坊主の餘ッぽと可愛さう、兵

糧取られて堪らんチウて渴へ死ぬ滅茶めち

や

扱てチヤカラカチヤン

○牙山の分捕品の餘ッぼを山のやう、南京米を

○を入らるいチウて施こす滅茶

扱てチヤカラカチヤン

○松崎陸軍大尉の餘ッぼを強い人討死するの

覺悟だチウて切り込む滅茶めちや、

扱てチヤカラカチヤン

○大鳥全權公使の餘ッぼをえらい人、朝鮮政府

も感じたチウで頼み入る滅茶めちや、

扱てチヤカラカチヤン

○成歡最寄の住民餘ッぼを嬉しさう日本の兵

隊さま、チウであがめる滅茶めちや、

扱てチヤカラカチヤン

○日本の人民の餘ッぼを義理堅い、聊か慰勞だ

チウで金を出す滅茶めちや

扱てチヤカラカチヤン

○日本の大勝利の餘ッぼを勇ましい又も凱旋

目出度チウで酒を飲む滅茶めちや

扱てチヤカラカチヤン

◎壯士唄愉快節



○遣れよ遣れ飽まで貫け我等の希望、支那  
 の素より野蠻國、日本の勿論開化國、天と地  
 ほどの大違ひ、迎も比較へ出来ぬなり、然る  
 を彼奴めは無鉄砲、曲直邪正も分らぬに、我  
 に手向ふ不敵の徒、數度の戦争まけ續け、猶  
 毛懲ざる無智の民、思へば不便に心根よ、イ  
 ザ此上を餘儀なくも、ドシ〜攻て打敗を  
 四百餘州を蹂躪し、日本の國威を海外に、旭  
 と共し輝かし、泰山頂上日の御旗、おし立る

のも愉快なり

○其二

○遣きよ遣き飽まで貫け我等の希望、卑怯未練は國の辱、一たん敵地へ踏出さば「歸らぬ覺悟で進めよや、腰にゝばさむ日本刀、氷を欺むく其光り、胸に固有の大和魂、水火も恐むぬ其勇氣、縦ひ百万千万の敵は來るとも何のそ乃、岩をも碎くは我國の「常の氣象」と知りぬべし、況てや未開のちやんくが

長袖長髪ノソくと、幾万來るとして赤ん坊の、天窓張るより猶ほ易し、愈く降参するまでへ、寄り來る奴等を捻倒し、片ツ端から生首を「引」て抜くのも愉快あり。

○其 三

○やまよやま飽まで貫け我等乃希望、敵は亞細亞の大國と人よ知られと支那の國相手よ取りては、不足あし、然きとも文化や開明は、夢よも知らかゝ頑固國井蛙管見我獨

り利口振りたる野ん氣者、孫吳や諸葛の軍法を、六韜三略虎の巻、澄し込みたる有様の實に笑止の限りあり、之を本氣で攻るのも大人氣かいどの思へとも、以後の見せしめ根限り、陸軍海軍はさみ打ち、グウともスウとも出ぬやうに「息」の根止めるも愉快なり

○其 四

○行よ行進めよく、皆諸共に、劔の山も何のその血汐の海も何のその「進」むも退く事

あかれ、千軍万馬の其中は、硝煙彈雨の其中に、泰然たるの、大和魂、敵を亡ぼす夫まで、旭の御旗を振かざし、路なき山をも、拔渉し、「舟なき川をも渡るべし、屍を山野に曝すのも、君の爲あり、國の爲あり、卑怯を振舞あるとき、我身の恥より、國の恥を進めや、皆進め、進んで軍功奏しつゝ、異國人も舌を巻き、天晴日本の武士と、歴史に残るも愉快なり

○其五

○行よ行け進めよく、皆諸共に昔も加藤の鬼將軍、朝鮮八道平けて、「凱旋唱へし例あり、今も昔しも同じ事、日本の勇氣は進むとも、決して退く事は、花は櫻よ人は武士、脆く散るも君の爲め、「敵地よ入るのも國の爲め、海外萬里に打越て、支那の征伐、面白、眼に遮る砲烟の雲か霞か朝霧か、敵に打込む砲丸の「雨か霰か雷か、山をも碎け



る地雷火や海をも裂れん水雷火号令一聲  
 一列に筒先そろへて進み行く勇猛武烈の  
 日本兵「争で豚尾乃敵すべき百戦百勝云々  
 せとも論よを証據ハ目前に豊島成歡又と  
 牙山打敗られて彼奴め等は周章狼狽潰走  
 す「イザや進めよイザ進め猶此上も進み行  
 き、南京北京を踏み暴る李鴻章まで擒にし  
 詰り日本乃屬國と「するも誠ニ愉快あり

●俗 語 一 篇

静岡縣藤枝町殿岡墓心氏より日清戦争阿房陀羅經と云へる一  
 篇を送越したれば慰みよもと左に掲ぐ

阿房陀羅經

佛説阿房陀羅經、抑も段々支那と日本と、戦争の行立て、聞いてクン  
 ナイ、朝鮮内乱閔族あんどが、支那の公使と、密に謀て、兵士を呼ん  
 だが、日本の腹立ち、天津條約違反の事から、騒動が始まり、大島公  
 使が兵士を率ゐて、朝鮮談判、獨立するの、政治の改革、ニツ一ツ  
 の手詰の催促、返答も困て、王妃が泣出す、閔族逃出す、夫れも續い

て、豊島海戦、日本の軍艦獲たり賢とし一ツ逃す、海船のフック  
マヤンチャンドブ、操江の捕獲だ、廣乙の駆出し、淺瀬も乗揚げ、  
引くもや引かれぬ、行くも行かれぬ、進退谷まる、船體破はれる、  
全體怖がる、ニツチもサツチも、動きが出来ぬ、腰が抜けたか、艦  
長はグワツク、艦體ブクツク、海ではやられる、牙山の戦等シヤ、支  
那の大將葉と云ふ奴、逃げるが上手で、朝鮮藝妓の上着を冠て、サツ  
サと逃出す、大きよ浮苦勞、ヨウコン逃げたよ、逃ると負るが、名譽  
の國だか、褒美貰て安樂世界だ、コンナ事から負るが專一、平壤さん  
どは、三日も先から、逃る覺悟は致したけれ共、寶貴の野郎が逃げる

はイヤだと、政府の意見よ、合はぬ許りよ、勝氣よあつたが、了簡  
違ひだ、黄海々戦軍艦イカッて膽玉ヨツクて、支那の客將ハンチツ  
ケンだか、片腕モガレル、丁の野奴は大砲の怒鳴りて、聾もあるやら  
白旗立ててるの、逃げるが善いだの、内部も騒動、日本の軍艦樺山大將  
は、ニコニコ笑て、コンナ海戦、朝飯前だよ、日本の技倆を、示すよ及  
ばぬ、併し愉快だ、郵船會社の清水と云ふ人、海戦景中、寫眞を撮る  
やら、平氣なもんだよ、開けたもんだよ、支那の軍艦種々の藝道、ナ  
カク上手で、水中もモグツて、鮑を取るのか、蛤取るのか、鯨の眞  
似して、鹽を吹いたり、水の中でもボツホと燃はたり、威海御苦勞

だ、大さよ御世話だ、海よは樺山陸よは山縣、大山大將、旅順々々ど、  
 攻込む軍勢、支那の運命早いかわい、負けるよや違ひない、狸親父  
 が了簡違ひだ、日本小國丸めて呑うと、飛んでもない事思て失策り、  
 國王腹立ち羽織は脱がされ、帽子は取られる、成程日本、國がコッソ  
 て賤玉イカクテ、人間利功で、戦争が上手だ、今度の戦争は文野の戦  
 ひ、日本の軍勢は、支那の内地で演習の積りで、トシくやらかす、  
 北京も天子も、ベソく泣いても氣の毒あからも、日本へ寄留だ、先  
 は我天皇陛下萬歲陸軍萬歲海軍萬歲帝國萬歲支那の政府の運命も  
 近きよのり南無彌陀佛く  
 (時事新報轉載)

明治廿七年九月二日印刷  
 明治廿七年九月五日發行  
 明治廿七年十一月廿日再版印刷 今月廿日

内務省檢閱濟  
 版權所有

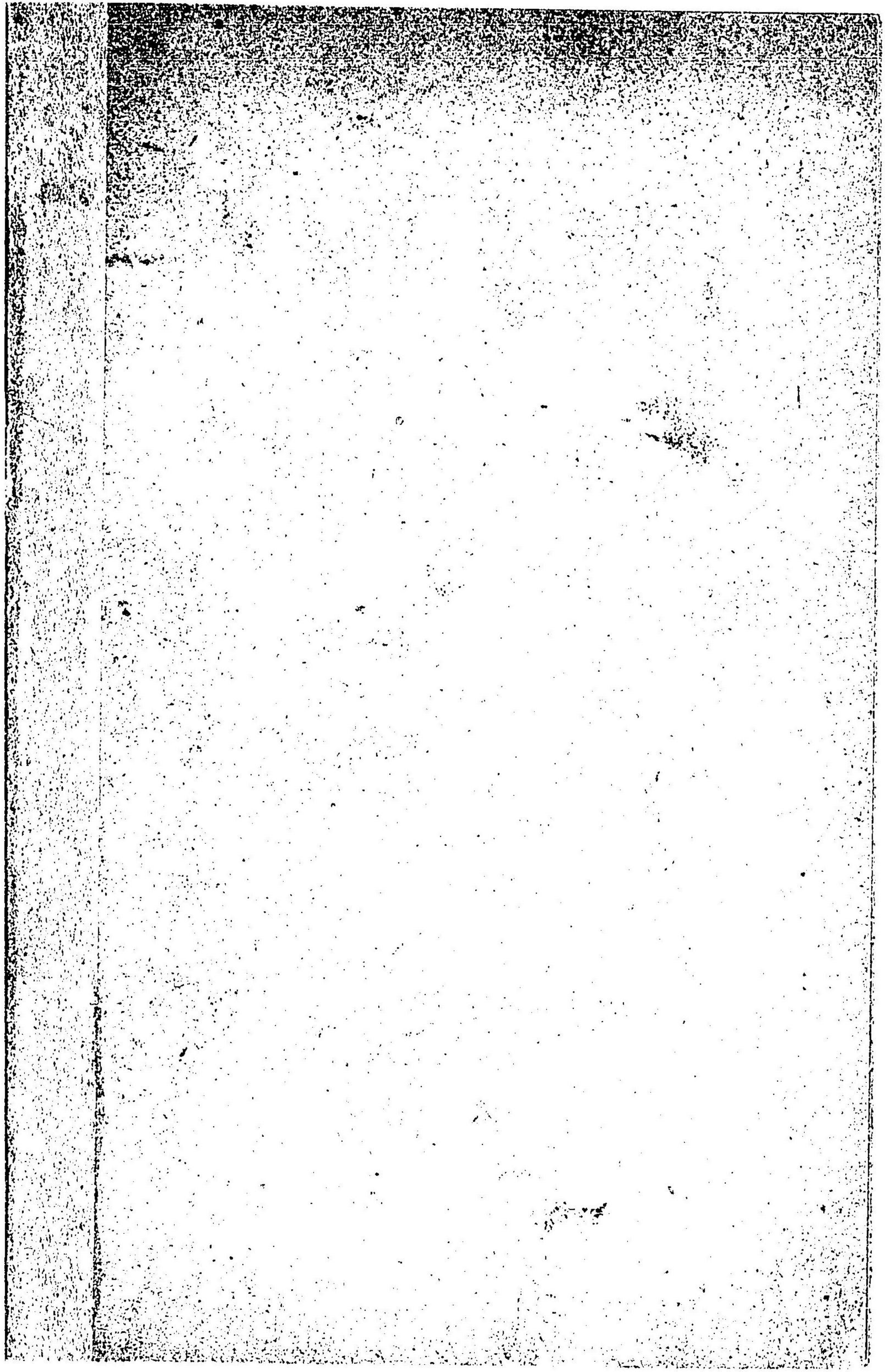
著作者 淺草區須賀町十九番地 西森武城 發行  
 發行者 京橋區南傳馬町一丁目十四番地 西村富次郎  
 印刷者 日本橋區新和泉町一番地 瀧川三代太郎  
 發兌 京橋區南傳馬町一丁目十四番地 弘文館  
 印刷所 日本橋區新和泉町一番地 今古堂 活版所

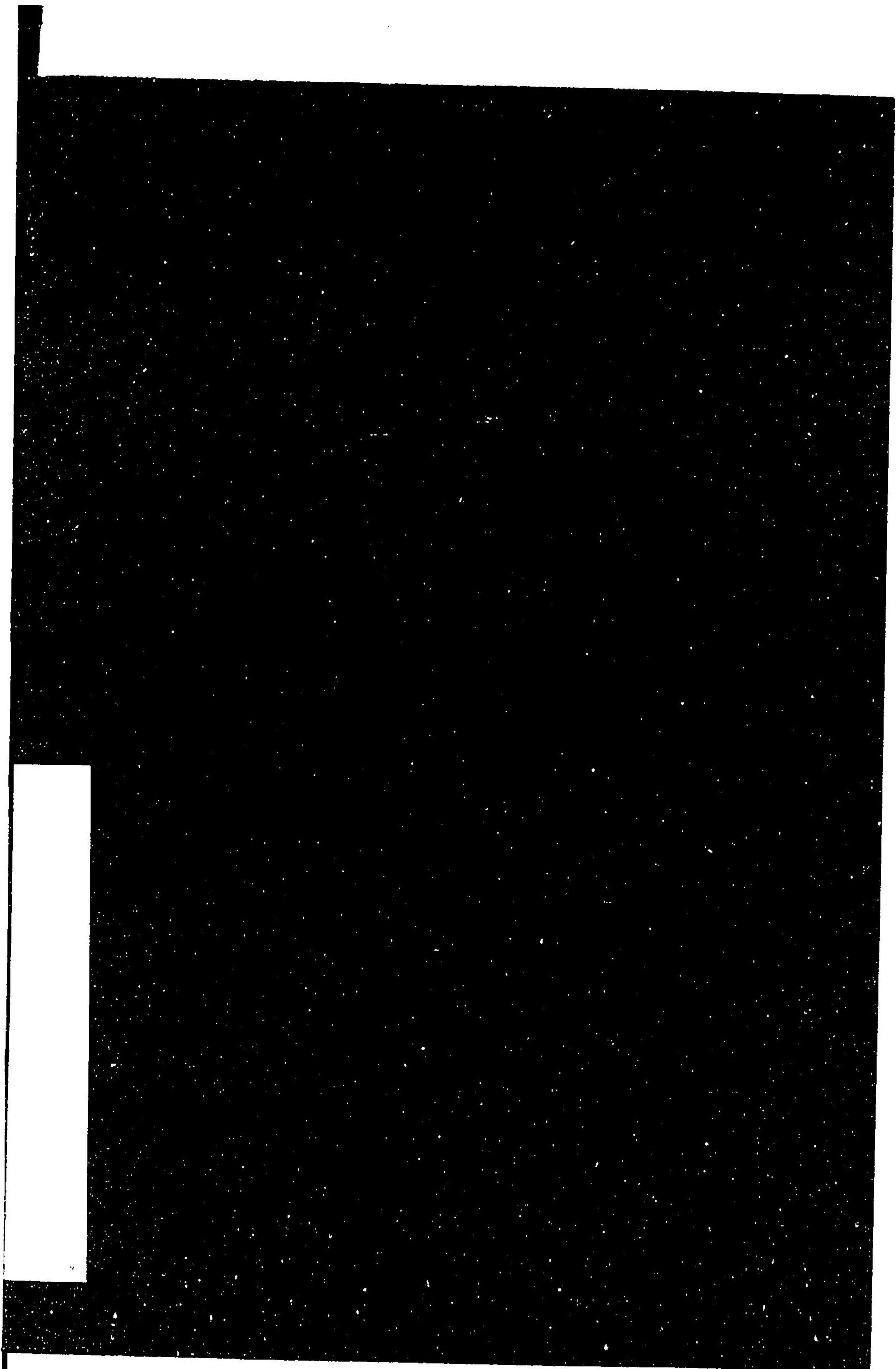
府下特別大賣捌所

淺草區三好町	大川屋錠吉
本石町二丁目	上田屋書店
日本橋通三丁目	金櫻堂
横山町三丁目	辻岡屋書店
馬喰町二丁目	山口屋書店
通油町	藤岡屋
日本橋區新大阪町鶴喜	書店
日本橋區若松町	柳原友吉
桶町一丁目	松榮堂
室町三丁目	杉本書店
大傳馬二丁目	長島支店

府下特別大賣捌所

南傳町二丁目	目黒支店
南紺屋町	薰志堂
南傳馬町二丁目	嵩山堂
京橋區大鋸町	青野友三郎
横山町一丁目	出雲寺
京橋區北槇町	鳳林館
神田表神保町	東京堂
日本橋通四丁目	東京雲堂
日本橋區堺町	東生鉄五郎
神田裏神保町	井上藤吉
日本橋區堺町	伊藤倉三





特64

385

清兵退治の歌

国立国会図書館

074346-000-8

特64-385

清兵退治の歌

骨皮道人/著

M27

CEI-1571

